第二外国語としての中国語の初級教育に於ける問題と対策

張　　軼　欧

0．はじめに

近年、中国経済の発展、及び日本企業の中国進出に伴い、日本における中国語学習者の数は1990年代以降増加傾向を辿っているが、大学における中国語学習者の殆どは中国語学科の学生ではなく、第二外国語（教養語学）の履修者である。第二外国語として選択することができる科目は大学によってそれぞれ異なるが、殆どの大学ではドイツ語、フランス語、中国語を大学初年度から設置している。独・仏・中の履修者順位については、『中国語』（内山書店出版）編集部が行ったアンケートの結果が参考になる。結果によれば、1993年の順位は独・仏・中であったが、1994年には独・中・仏、1995、1996年には中・独・仏の順位になり、中国語が英語に次ぐ位置を占めるようになった[1)]。

大学における中国語履修者の増加は、中国語教育者の立場から見れば、もちろん喜ぶべきことである。しかし、履修者が増加する一方で、いろいろな問題も次第に認識されるようになった。その問題の中で、中国語教育の初級段階において何を中心に教えるのかについて多く論じられているが、これら研究の殆どは教える側の立場から行なわれており、学生の立場はあまり考慮されてない。

小論では、今の大学の教養教育における問題に着目し、今の大学における学生の学習現状に基づいて、その現状の下で、中国語の初級段階の課題が何かを分析し、その上で、受講者としての学生の立場を考慮し、その課題を達成するためにいかなる授業を行えばよいのかについて論じたい。

1．中国語の初級段階の課題

1－1　中国語初級教育[2)]の指導目標

周知のように、初級段階における教育の成否が教養中国語教育効果に大きい影響を与えている。大学における初級段階の学習目標については、近年、共通している意見として、基本文法構造、基本語彙、及び中国語の発音などの習得が挙げられている。この基本文法、基本語彙の具体的な範囲については、瀬戸（1990）が述べているように曖昧なものであるが、初級段階の学習目標が基本文法構造、基本語彙、中国語の発音であるという点は共通認識を有している。

しかし、いままで、殆どの教育者は中国語の年間授業時間が少ないため、一年間で中国語の基礎をすべてを教えることが不可能だと考え、それぞれ初級段階の指導目標を主張している。その代表的なものとしては、立石（1983）は、大学における語学教育は口頭言語の教授ではなく、言語についての学問に重点を置くべきであると主張し、瀬戸（1990）は、初級段階は口頭言語の教授を中心とするべきだと主張している。他方、宮本（1993）は、文法の学習を中心にすることを主張している。

以上のどれも相応の道理があるが、いずれにしても、教える立場からの主張であり、受講者である学生を考慮していないようである。仮に受講者である学生がみな真面目で、勉学意欲の高い学生であれば、方法によらず一定の学習効果が上がるはずである。しかし、実際、想定された学習効果が上がっていないのが実情である。

1－2　大学生における問題点：学力低下

日本の大学教育が抱える大きな問題のひとつは、学生の学力低下である。少子化や大学の大衆化により、学生が以前より簡単に大学に入学できるようになった。大学生になると、あまり勉強に関心を持たないことが総務庁の行った在宅学習時間に関する調査の結果からもわかる。結果によると、「殆どしていない」と回答した大学・大学院生は45.1％にのぼる[3)]。大学院生は研究を目的として大学院に進学しているので、大学生よりは勉強時間を割いているはずである。仮に大学院生を除外した場合、殆ど勉強してない大学生の比率は更に高くなってしまう。調査対象にある学習時間とは、全ての科目の合計時間であり、一般教養としての中国語に割く在宅時の勉強時間がゼロに近いことは調査結果からも容易に想像できる。

1－3　初級中国語の履修目的

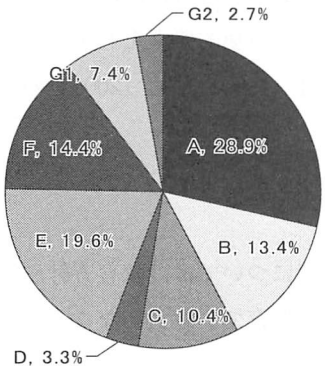
毎年中国語を履修する学生の人数は多いが、その目的意識は学生個人で異なる。そこで、大学生の中国語履修に対する目的意識などの実情を調査するため、筆者は、ア（男女共学総合大学）、イ（男女共学総合大学）、ウ（女子総合大学）三大学に在籍している計372名の一年生（理科系、文科系を含む）の学生を対象に、アンケートを実施した[4)]。アンケートの中から次の設

問を抜粋した。その設問と結果をまとめると、次のようになる。

設問：中国語の授業を取った理由は何ですか。

図１

中国語を選択した理由の比率表



Ａ：必修科目だから。
Ｂ：他の外国語より単位を取り易そうだから。
Ｃ：他人に勧められたから。
Ｄ：就職に有利だから。
Ｅ：中国に関心があるから。
Ｆ：社会に入ってから、役に立つから。
Ｇ：その他。（具体的に書いてください。）
複数の理由がある場合は、その順位を書いてください。
第1位（　）第2位（　）第3位（　）第4位（　）

（注：①各選択肢の比率は、単独回答者数と“第１位”として選択した複数回答者数のみを図に計上した。具体的には、Ａの28.9％には単独回答数と複数選択の内、Ａを第１位として選択した回答数を含んでいる。
②“Ｇ”はＧ１（積極的要素）とＧ２（消極的要素）に分ける。）

ここでは、分かりやすいように、選択肢のＡ、Ｂ、Ｇ２は中国語を勉強する理由の消極的要素とし、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇ１は積極的要素として置いた。Ｃ“他人に勧められた”の場合、将来中国語が役に立つからという積極的な理由を含む可能性もあれば、中国語の単位取得が容易だからという消極的な理由を含む可能性もあるので、Ｃを中立的要素と呼ぶこととする。

図から分かるようにＡ、Ｂ、Ｇ２のように中国語を勉強する消極的要素の比率は45％であり、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇ１のように積極的な比率は44.7％であり、Ｃのように中立的な要素は10.4％である。この結果からわかるように、学生が中国語を勉強する理由として、消極的要素の比率は積極的比率とほぼ同じであるが、消極的要素がわずかの差で上回っている。

学生の学習動機には消極的要素があるということについて望月（1990）、趙（2001）もすでに注目していたが、このような動機を持つ学生に対して、望月（1990）は“始めからやる気のない学生にやる気を起こせるのは無理だろう”と考えており、“このような学生に対しては、どんどん‘不可’の評価を下し、単位を与えないようにしなければならない”という結論を出している。趙（2001）は学生個人の動機に応じて、履修生を一年間クラス、二年間クラスなどにクラスわけをすればよいという結論を出している。

しかし、これらの意見には問題点が感じられる。先述したように図１の調査結果は、アンケート調査表において、単独回答者数や“第１位”と選択した複数回答者数のみを図に計上したものである。殆どの学生の学習動機にはＡ、Ｂ、Ｇ２という消極的要素が単独で選択されていたのではなく、複数回答した学生が多い。また、選択肢の内、Ａ、Ｂ、Ｇ２という消極的要素

が第1位として選択されているが、D、E、F、G1などのような積極的要素も含まれているのが分かる。アンケート調査によれば、A、B、G2だけのために中国語を履修した学生の比率は28.6%に留まっている。また、英語の勉強とは違って、殆どの学生にとっては中国語は完全に未知の世界であり、まったくゼロからの学習であるので、学生のやる気は先生の腕次第と言える。授業から面白さを感じればやる気が沸いてくるし、最初の段階における消極的要素は積極的な要素に変わることができる。逆の場合もそうである。積極的要素を有する学生であっても、授業の内容次第ではやる気も無くなる。よって、望月（1990）と趙（2001）のような考えは根本的解決案ではないと思われる。

1－4　初級段階の課題

以上の分析から分かるように、初級段階の教養中国語教育については、教育方針や学生自身などに多様な問題が存在している。チョムスキーは“外国語教育で一番大切なことは、いかにしてやる気を起こさせるか[5)]”と指摘している。これは全ての外国語に対して当てはまることだが、今の日本における教養中国語教育においては、とりわけ重要な意味を持っている。前述した大学教養中国語教育におけるさまざまな問題のもとで、初級段階での課題は、何を教えるかよりも、どのように教えるかということである。もっと具体的に言えば、どのように教えていけば学生の学習意欲を引き出すことができるのかということが問題なのである。

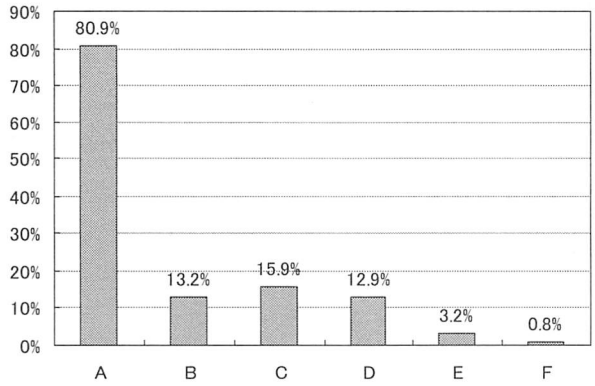
2．初級中国語教育に関するアンケート調査

2－1　学生による初級中国語教育への評価

前述したとおり、中国語初級段階の課題は学生の学習意欲を引き出すことである。学生の学習意欲を育成するには、まず学生の中国語に対する興味を引き出さなければならないと考えられている。興味を引き出すには、まず学生の立場に立って、学生が中国語の何を勉強したいか、中国語を勉強して何に面白さを感じたか、どのような点が嫌であるか、今の授業に対して満足しているかどうか、不満な点が何かなどについて理解を深めなければならない。そこで、筆者は、1－3節と同じ学生グループを対象に次のようなアンケート調査を実施した。各設問とそれに対する回答をまとめると、その結果次のようになる。

設問①　中国語の授業を通して、中心に学びたいこと

表１

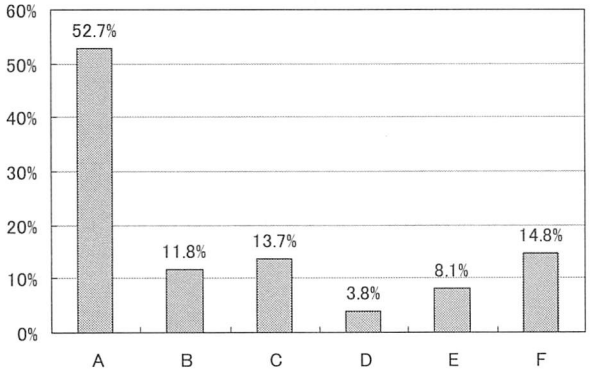


A：会話
B：文法
C：読解力
D：文化
E：試験対策
F：その他

表１によれば、A“会話”の回答者数が最も多い。B“文法”以下は、回答者が少なく、いずれも二割以下となっている。E“試験対策”は、主に中国語に関連する資格、たとえばＨＳＫ、中国語検定試験などを受けるときの試験対策を指している。なお、F“その他”には、中国人とのコミュニケーションのとりかた、中国語の漢字と日本語の漢字の違い、また、そのニュアンスなどの答えが見られた。この結果からは、学生たちが中国語を通して、中心に学びたいものは“会話”であることが分かる。

設問②　中国語の授業に感じた面白さ

表２



A：中国語を話せるようになったこと。
B：授業中で紹介してくれた中国の文化。
C：先生の説明がわかりやすいこと。
D：面白い教科書を使用していること。
E：その他。
F：なし。

表２によれば、A“中国語を話せるようになったこと”最も多い。その次のB、CとFが占めている率はあまり差がなく、ほとんど１割から1.5割の間であるが、その中でもFの比率が一番高い。E“その他”には、答えはいろいろがあるが、“日本の漢字と中国の漢字の違い”、

“中国語の発音が面白い、中国語で書いた文書を少し読めるようになった”などの答えが多い。C“先生の説明がわかりやすいこと”はわずか２％の差で、B“授業中紹介してくれた中国の文化”より上回っている。F“なし”という項目の人数は14.8％を占めている。表２で人数が最も少ないのはD“面白い教科書を使用していること”である。表２の結果から、まず学生が中国語の授業に感じた面白さは中国語を話せるようになったことであることが分かる。これは表１のAの項目“授業中会話を中心に勉強したい”と一致している。そして、学生が教科書の内容に対して、あまり面白いと思ってないことが分かる。

設問③　中国語の授業で感じた嫌な点

表３

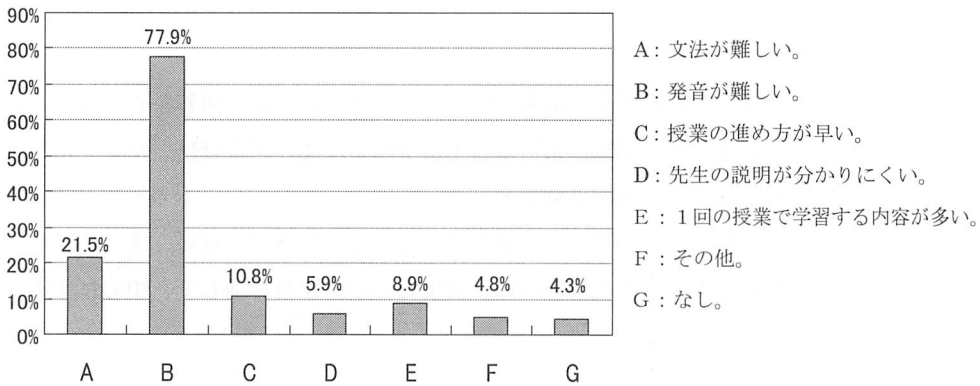
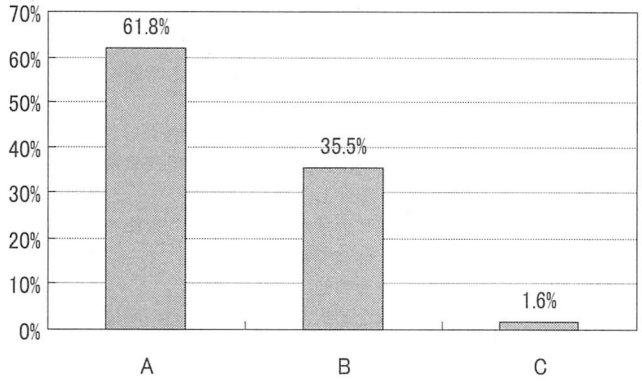


表３によれば、B“発音が難しい”が一番多く、８割弱という比率はほかの項目より圧倒的に多い。A“文法が難しい”は２割あまりである。その次に、１割ぐらい占めてるのはC“授業の進め方が早い”である。E“学習する内容が多い”はCと同じぐらいである。D“先生の説明が分かりにくい”、F“その他”、G“なし”はほとんど同じ位で、みな１割以下である。F“その他”には、“ピンインは難しい”、“漢字は難しい”などの答えがもっとも多く見える。表３の結果から、まず学生にとっては、中国語の勉強では発音、及び文法は最も難しいことが分かる。その次に、一回の授業で勉強する量も学生の勉強する意欲に影響していることがわかる。

設問④　今の中国語の授業に対する満足度

表４



A：満足している。

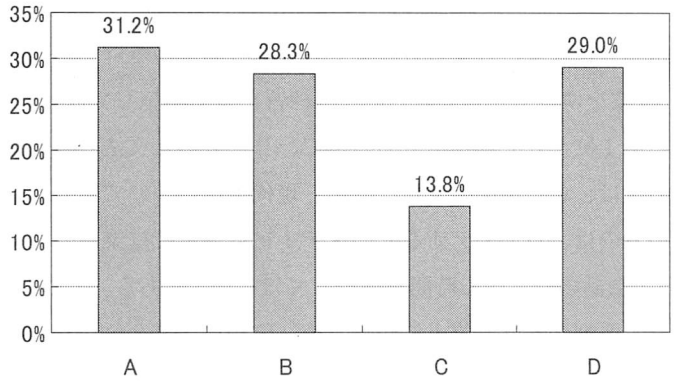
B：多少不満がある。

C：大いに不満がある。

表４の結果から、６割以上の学生が今の中国語の授業に満足している。中国語の授業に対して、大いに不満を持っている学生が２％しかいない。

設問⑤　不満を持つ理由

表５



A：先生の説明が分かりにくい。

B：テキストの内容が面白くない。

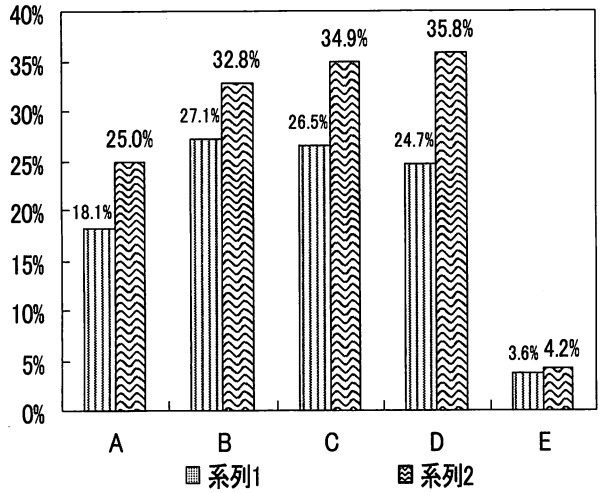
C：先生の説明が多く、学生の会話する時間が少ない。

D：その他。

表５によれば、A“先生の説明が分かりにくい”、B“テキストの内容が面白くない”、D“その他”はほぼ同じ比率を占めていて、それぞれほぼ３割をしめる。その中でも、Aが最も多い。BとDはほぼ同じである。Dの中には、“授業中に私語が多い”、“出席の取り方が厳しい過ぎる”などのような回答が含まれているが、一番多いのはやはり“進み具合がはやすぎる”、“勉強する内容が多い”ということである。表５の結果から、先生の説明が学生の中国語に対する学習意欲に最も影響を与えている。

設問⑥　現在の授業に希望する点

表６



Ａ：もっと会話の練習する時間を増やしてほしい。
Ｂ：もっと文法の説明を増やしてほしい。
Ｃ：中国の文化、歴史、現代事情について紹介してほしい。
Ｄ：ビデオなどのメディアを使って授業を行って欲しい。
Ｅ：その他。
複数を選択した場合は、その順位を書いてください。
第1位（　）第2位（　）
第3位（　）第4位（　）

（注：系列１は単独回答者数と“第１位”を選択した複数回答者数のみを計上している。系列２は順位に関係なく選択した学生をすべて計上した。たとえば、Ａだけ選択した（単独の回答）人は47人、複数回答があり、Ａを第１位として選択したのは13人、第２位として選択したのは17人、第３位として選択したのは４人、第４位選択したのは２人。系列１は47＋13＝50人が全員に占める比率である。系列２は47＋13＋17＋４＋2＝83人が全員に占める比率である。）

表６によれば、系列１にせよ、系列２にせよ、ＡからＤまでそれぞれの間での差はそれほど大きくない。Ｅ“その他”には、“授業をゆっくりして欲しい”、“練習を多く実施して欲しい”といった要望が多かった。系列１に第１位として選んだものの中で、Ｂ“もっと文法の説明を増やしてほしい”が最も多い。その次は、Ｃ“中国の文化、歴史、現代事情について紹介してほしい”である。第３位を占めているのは、Ｄ“ビデオなどのメディアを使って授業を行って欲しい”である。第４位はＡ“もっと会話の練習する時間を増やしてほしい”である。しかし、系列２はこれらと異なる結果が出た。系列２では、第１位がＤ、第２位がＣ、第３位がＢ、第４位がＡである。一般的に、Ｄの項目で言及しているビデオなどのメディアは主に、映画、画像などであると考えられる。もちろん、その内容は主には中国の文化、歴史、現代事情となる場合が多いと思われる。それはＣと一致している。系列１にせよ、系列２にせよ、ＣとＤを合わせて考えてみると、学生が現在の授業に最も希望している点はただ単に中国語ではなく、広い意味の中国の文化を知りたいということである。

２－２　図表の分析

以上の図と表の結果から、以下の点がわかる。

（一）　学生が中国語の授業に対して最も期待していることは、コミュニケーシュン能力の獲得である。学生は中国語を話せるようになることによって、中国語の面白さを強く感じていることが分かった。

（二）　中国語の授業で学生を一番悩ませるのは文法である。

表３の結果によれば、学生が中国語の授業で感じた嫌な点は、発音が難しいという回答が最も多く、その次に文法が難しいとある。しかし、表５の結果によれば、学生の中国語の授業に対する一番大きな不満は教師の説明が分かりにくいということである。ここでの説明は文法についてのことだと思う。表３と表５の結果を比べてみれば、発音が難しいことは、学生の中国語の学習中の不満要素になっておらず、また、学生の中国語学習に対する意欲に影響を与える要素ではないことがわかった。いままでの外国語学習（中学校、高校などで行なわれている外国語の学習）は文法を中心にやっていたので、その影響を受けて、外国語の学習はイコール文法の勉強と考えている学生が多いと思われる。故に、分からない文法があったら、大変不安になってしまう。

（三）　学生は中国の文化、歴史、現代事情などについて勉強したいという要望がある。勉強する教材は教科書だけに頼らず、ビデオなどのメディアを利用して授業を行うべきである。

３．アンケート調査の結果に基づく対策

どんな授業も、教える側と学ぶ側の両方からなっている。学ぶ側を無視して、一方的に教える側からの授業の進行は必ず失敗を招く。学生のことを考えるということは、中国語の授業が、学生の意志によって左右されるということではなく、学生の関心の対象に基づいて、学生の中国語に対する興味を引き出し、教養中国語教育の学習効果を引き上げることである。上述した日本の大学における教養中国語教育の実情や学習途中で見られる問題、学生の希望に基づいて、初級段階の教養中国語教育に以下のように取り組めば、より良い効果を得られるのではないかと考えている。

（一）　授業の中心は、会話に置くべきである。

表１、表２の結果から分かるように、学生は、話すことから楽しみを感じているので、授業の中心を文法ではなく、会話に置くべきである。筆者がアンケート調査を実施した大学の現役中国教師に対する簡単な調査によると、ほとんどの先生は、授業中に学生に教科書の会話文を一、二回程度読ませたり、本文を暗誦させて終わらせてしまうケースが多かった。外国語を勉強する際に、暗誦は勿論大変重要なことであるが、そのまま終わってし

まうのは、中国語の学習意欲を引き出すにはあまり貢献しないであろう。授業の中心は会話に置くべきであることは、単に教科書の会話文を読ませ、暗誦させるというのではなく、学生に授業中に学習した文型を真似させて、学生が好きなように会話（の文章）をさせる方がより一層効果がある。人数の多いクラスの場合は、何組かの学生に前に出て来てもらい、学生の前で発表させるのが効果的である。少人数の場合は全員で行う。

各大学で使用している教科書はどれも会話形式を踏襲しており、学生の自由会話に関連のある語彙を提供している教科書も中にはある。そのような教科書や副読本が無い場合は、教師がその授業の会話練習のために関連語彙を準備する必要があるだろう。周知のように、コミュニケーションの基礎は語彙である。外国語教育の初級段階において語彙を増やすことの重要性は陸倹明氏（2000）が既に言及している通りである。外国語習得では、まずたくさんの語彙を覚えなければならないが、日本の大学生の学力低下の状況下ではそれを実施するのは現実的に難しく、教科書の本文に収録されている日常生活中において不可欠な基礎語彙と、学生にとって興味がある言葉だけを先ず覚えさせる方が有効であろう。

（二）　文法の学習においては、学生の不安を無くすことが大事である。文法事項は文字ではなく、なるべく“A＋B＋C”のような公式の形で教える方が良い。初級段階では、個々の文法事項に対して、なるべく一番基本的なものだけを中心に教えた方が効果的である。具体的な文法事項によって教授法を変えるべきである。

初級段階を会話中心にするということは、文法の教授を省くということではない。周知のように、文法を学習するのはそれによって自分が言いたいことを正しく言えるようにするためである。しかし、学生が中国語の勉強途中、理解できない文法があれば不安になってしまい、勉強意欲がなくなってしまう。この段階では、教師が学生の不安を無くすことが重要であると考える。

文法は簡単に言えば、文を作るルールであり、抽象的なものである。公式は抽象的な文法を直接に、明確な形式で表すことが可能となり、学生にとっては、分かりやすく、簡単に覚えることができる。たとえば、初級段階の“AはBより…である”という比較文の場合、公式で表示すると、“A＋比＋B＋述語＋（量差）”のようになる。この公式に基づけば、学生が“私は彼より二歳年上です。”という文を、“我他比两岁大。”という間違う率がきっと減るはずである。

中国語においては、一つの文法事項に関しては、関連する知識がかなり多い場合がよくある。たとえば、前述した“AはBより…である”という比較文を例に挙げると、『実用現代漢語語法』[6] では、比較文における省略問題、述語の前に付ける“还、更、再”などの程度副詞に関する問題までかなり詳しく纏められていた。比較文を完全に習熟するに

は、これらの知識がすべて必要であるが、これらの知識を段階別に教えるべきである。一気に全部教えるのは学生を混乱させるだけである。初級段階の比較文の場合は、述語は形容詞だけを中心に教えれば十分である。述語が“有”＋抽象名詞、能願動詞＋動詞などの文例、省略問題、そして述語の前に付けられる程度副詞の問題などに関する知識は中級以上の段階に分類されるべきであろう。授業中、もし学生がこれらに関する質問をした場合は、具体的な問題に対して、その学生個人に説明するだけで十分であると思われる。

頻度が高く、且つ日本語の表現とは違う表現については、授業中、その区別をしっかり説明すべきである。その上、繰り返し練習させることも必要ある。たとえば、中国語の形容詞述語文の構造は英語と日本語の形容詞文とは異なるので、その区別をしっかり説明するべきである。ただし、学生がその説明が分かっていても、実際に使う時は母国語の影響を受けて誤ってしまう場合がある。一例として、“今日は天気がよい。”という形容詞が現れる文を中国語に訳すときは、往々に“今天天气是好。”、“今天天气好。”というように言ってしまう傾向が多い。このような文法上難しくない問題であっても、実際に使うときに間違ってしまう文法事項については、学生が完全に使えるようになるまで、授業中頻繁に練習しなければならない。

“我比他大两岁。”、“今天天气很好。”のような学生にとって理解しやすい文法事項に対して、先に中国語の文を覚えてさせ、それから文法の説明を行うほうが印象が強く残るが、学生にとって理解しにくい文法事項に対しては理論を先行させて教授するほうが有効な場合もある。たとえば、日本語には中国語が所謂“補語”という文法事項がないので、“得”を使う補語(教科書によって様態補語、程度補語など呼び方は様々である。小論では、様態補語と統一する。）は、初級段階では学生にとっては、理解し難い文法事項である。

様態補語を教授するには、まず、次のように、「補語は動詞、あるいは形容詞の後ろに置いて、その動詞や、形容詞の結果、方向、回数、様態、評価、程度などを詳しく説明する部分」であると補語の意味を先に説明するべきである。そして、日本人にとって一番わかりやすい結果補語“吃完（食べ終わる)”、方向補語“出来（出て来る)”などの日本語と似ている例を挙げ、「補語は具体的に説明している内容によって、結果補語、方向補語、可能補語、様態補語、数量補語などに分類される」と説明し、学生に補語の意味を理解してもらう方が良い。その次の段階で、「様態補語とは直前の動詞に対して評価、描写、判断などを具体的に説明するものである」と説明する。

学生が様態補語の意味を十分に理解した上で、「様態補語の構造は“（V）＋（O）＋V＋得＋形容詞、動詞など”である」ことを説明した方が学生にとってわかりやすい。教科書によって補語が出てくる順番はばらばらである。結果補語、方向補語を先に出したほうが、学生にとっては分かりやすいが、様態補語が一番先に述べられる教科書も結構ある。この場合は、学生に分かりやすいように、上述の順番に従って教授するほうが効果的であ

ると思われる。また、すでに、先に結果補語、方向補語が述べられても、様態補語を教授する時に、最初に結果補語、方向補語などの復習から始める方が大切である。また、初級段階では、様態補語に対して、“V＋O＋得＋形容詞、動詞など”という間違った使用例が多いので、授業中、“得”の位置を学生に強調するべきである。

また、学生が混乱しやすい表現に対しては「比較」する教授法が学生にとって分かりやすい手法である思われる。一例として、初級段階では、存在を表す“有”、と動詞“在”の使い方について、“一本辞典有桌子上。”、“教室在田中。”のように誤用例がよく見られる。このような事例に対して、次のような比較が効果的な説明であると思われる。“有”を使う場合は、その構造は“場所＋有＋特定してない人物、物”となり、“在”の場合は、“特定している人物、物＋在＋場所”となる。

初級段階で学生がよく誤ってしまう文法事項を、従来の文法理論により大抵は説明できるが、時には解釈できない問題も存在している。それらの問題に対しては、学生にその旨を説明し、正しい表現をそのまま覚えさせ、学生の不安を無くした方が今の段階では一番良い方法かもしれない。

（三）　教科書だけに頼らず、授業中、ビデオ、雑誌などを使って、学生に中国の文化、歴史、現代事情などを紹介するべきである。

表6で分かるように、学生はビデオなどのメディアを通して、中国の文化、現代事情などを知りたいという要望がかなり強い。ゆえに、初級段階では、雑誌やビデオを利用して学生に中国のことを紹介したほうが、学生の中国への関心を高め、中国語の授業への興味を引き出させることができる。

近年、外国語教育における文化教育の重要性はますます注目されている。中国での外国人留学生に対する指導内容は一般的に、発音、文字、語彙、文法、文化という五つの内容を含んでいる[7]。中国の文化の教授に関する主な目的は、留学生たちにもっと中国の文化を知ってもらい、より全面的に理解することを通して、もっと正確に中国語の実力を増強するためである。日本の教養中国語教育でその段階まで求めるのは現実的ではないが、学生に中国の文化、実情などを簡単に紹介することは、学生の学習意欲を引き出す効果的な方法である。

ビデオなどを使うことは学習意欲を引き出す効果があると広く認められているが、表6で分かるように、多くの学生がC“中国の文化、歴史、現代事情について紹介してほしい”と、D“ビデオなどのメディアを使って授業を行って欲しい”ということを強く希望している。一方、この結果から、多くの教育者はまだ十分にこの方法を活用してないことも読み取ることが出来る。学生が中国の文化などに関心を持つ以上、教育者はそれを重視しなければならない。必要に応じて、毎回10分間程度鑑賞する時間をとってもいいのではない

だろうか。

4．おわりに

学習意欲は学習効果に重要なかかわりを持っている。小論では、日本における初級段階の教養中国語教育の現場から、まず、今の大学生の学習における問題点を着目し、教育現場にいる教育者にとっては、初級段階の課題は、学生にひたすら学問を教えることより学生の中国語に対する学習意欲を引き出すことがもっとも大切であることを指摘した。その上で、学生の学習という立場から、学生の中国語の学習に対する興味、不満、希望などに対して、アンケート調査を行い、その結果に基づいて、学生の学習意欲引き出すには、中国語初級段階における指導が、文法偏重ではなく、会話中心の授業にし、学生に話しをさせる（単純に読む、暗誦ということではなく）機会を多く与えること、文法の勉強においては、文法事項はできるだけ公式で表示し、文法事項によって、異なる教授法の導入が必要となる。この段階においては、学生が文法に勉強に対する不安を無くすことも大事であること、最後に、授業中、写真、雑誌、ビデオなどを使って、中国文化に関する内容も触れる必要があることを提案した。

従来の研究では、学習する学生の立場をあまり考慮していなかったが、小論では、学生の立場に着目し、教育者が学生の意志に左右されるのではなく、学生が興味がもっているところから着手し、学生の中国語に対する学習意欲を引き出し、授業効果をアップさせるのが目的である。また、小論のアンケート結果に基づく対策案が実際にどれほど効果があるのかについて、継続して調査する予定である。

注

1）方経民「日本における中国語教育：1994－1997」、『言語文化研究』第20巻　第1号　2000年9月。
2）各大学での中国語学習の各段階に関する呼び方は種々様々である、入門中国語と呼ぶ場合もあれば、初級中国語と呼ぶ場合もある、それ以外にも級を使わず、中国語Ⅰ、中国Ⅱと呼ぶ場合も少なくない。大学中国語学習項目の大綱化が策定されてない限り、学習レベルによって各段階の名称を決めることは難しい。そこで小論では、週2コマの授業コースを標準モデルとして、大学一年次を初級段階と呼ぶこととする。
3）田中正浩「現代日本人学生の学習意識―意欲の低下とその背景」『駒沢女子短期大学　研究紀要』第36号　2003。
4）アンケートを正式に実施する前に、選択肢をつけずに50人の学生に事前アンケートを実施した。事前アンケートの調査結果に基づいて、今回のアンケートを作成した。小論に関わっているアンケートはすべてこのように作成したものである。
5）チョムスキー『言語と知識―マナグア講義録』田窪行則、郡司龍男訳　産業図書　1989年。
6）劉月華『実用現代漢語語法（増訂版）』　商務印書館　2006年4月。
7）陸俠明「“対外漢語教学”中的語法教学」『語言教学与研究』2003年第3期。

参考文献

鄭麗雲「教養中国語教育の現状と対策」『言語文化研究』第16巻　第２号　1996年。
望月八十吉「初級段階における中国語教育の諸問題」『北九州大学外国語学部紀要』1990年３月。
興水優「中国語教育の現状と課題」『応用言語学研究　NO.２』（明海大学大学院応用言語学研究科紀要）2000年３月。
三須裕介「第二外国語としての中国語教育」『広島経済大学研究論集』第27巻第３号　2004年12月。
今西凱夫「大学における中国語教育の現状調査」『研究紀要』（日本大学人文科学研究所）第28号　1983年。
立石廣南「大学における中国語基礎教育の目標について－学生と教科書との問題を中心に―」『研究紀要』（日本大学人文科学研究所）第28号　1983年。
瀬戸宏「大学中国語教育の学習段階と学習目標試論―教養課程を中心に」『中国語学』1990年。
宮本幸子「日本第二外国語的中国語教育問題的探討」『中国語学』1993年。
鈴木博「関心・意欲・態度を育てる外国語（英語）の指導」『中等教育資料』平成８年８月号。
趙静「大学における現行中国語教育の問題点と改善法について―制度上の問題点を巡って―」『言語文化研究』13巻１号　2001年５月。